

『信仰は日常生活の中で』

ヘブル人への手紙 13 章 1～6 節

I. 信仰から出て来る生活

本日からヘブル人への手紙の最終章に入ります。13 章は、本書の全体をまとめる章となっています。この手紙の著者は、迫害の中にあつたユダヤ人キリスト者たちに対して、彼らがなぜキリストの恵みに留まり、信仰の競争を最後まで走り続けなければならないのかについて述べてきました。そしてそれは、彼らには揺り動かされない御国に入るという約束が与えられているからです。であれば、そのような特権に与ったキリスト者はどうあるべきなのでしょう。そこでこの手紙の著者は最後に、それにふさわしい生き方とはどのようなものなのかを語ってこの手紙を結ぶのです。

私たちの生活は何を信じるかによって決まります。つまらないものを信じていればつまらない生活となり、すばらしいものを信じていればすばらしい生活になります。ですから、私たちが何を信じて生きるのかということは、私たちの生活を左右するとても重要なことなのです。ですから、この手紙の著者は、私たちが信じている信仰の内容とはどのようなものかを述べた後で、いよいよその信仰から出てくる生活について勧めるのです。

II. 奨励

この箇所には三つの奨励が含まれています。

① 兄弟愛への奨励（1～3 節） ②結婚の神聖さの強調（4 節） ③強欲への警告（5～6 節）

これらはすべて、現在の私たちの生活にもそのままあてはまります。

1. 兄弟愛への奨励

まず、第一のことは、1 節に「**兄弟愛をいつも持っていなさい。**」とあります。このヘブル人への手紙をはじめ、聖書全体でキリスト者に対して強く言われていることは、「**お互いに愛し合いなさい**」ということです。この手紙の読者であつたユダヤ人キリスト者たちは、キリスト者に回心したことで、これまでのようにユダヤ人としてその共同体の中で生きていくことが困難になっていました。そのような時に彼らに必要だったことは何かというと、互いに愛と善行を促すことです。ですから、10 章 24 節には、「**また、愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。**」と勧められ、また、25 節にも「**ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合ひましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。**」と勧められていました。そういう状況であつたからこそ、ますます熱く愛し合うことが必要だったのです。

そして、ここには「**いつも**」と強調されています。調子がいい時だけでなくいつもです。以前は熱心に愛し合っていたけど、今は冷めてしまいましたというのではなく、「**いつも**」です。6 章 10 節には、「**神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れたりなさいません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。**」とあります。彼らはかつて熱心に愛し合っていました。しかし、キリスト者としての歩みの中で迫害や苦難に会うと、いつしかその愛が冷めてしまっていたのです。

これは私たちにも言えることではないでしょうか。イエス様を信じて救われた時は喜びにあふれていました。教会に集まって一緒に賛美したり祈ったりすることが楽しくて、できるだけみんなと交わりたと思っていました。しかし、長い信仰生活の中で人間関係に疲れたり、様々な問題に直面すると、いつしかそのような関わりを避け、自分の殻に閉じこもるようになります。しかし聖書が教える教会とは、自分の好みや利益のために集まるような所ではなく、神が招き、共に生きるように導かれた信仰の共同体であり、神の家族なのです。ですから、イエス様は、ヨハネの福音書 13 章 34～35 節で「**わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。**」と、この共同体を実現するために言われたのです。

イエス様は、ラオデキヤの教会に対して黙示録 3 章 15～16 節に「**わたしはあなたの行いを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。そのように、あなたは生ぬるく、熱くも冷たくも**

ないので、わたしは口からあなたを吐き出す。」と書き送りました。ラオデキヤの教会はどういう点で熱くもなく、冷たくもなかったのでしょうか。自分のことしか考えていなかったという点においてです。同 3 章 17 節に「**あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっていない。**」とあるように、彼らは自分の姿が見えませんでした。ですから、彼らに必要だったのは、他の兄弟が見えるようになるために、目に塗る目薬を買うということだったのです。

それは私たちも同じです。自分のことだけに向きがちな関心を、他の兄弟に向けなければなりません。パウロも、ピリピ書 2 章 4 節で「**それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。**」と勧めています。「兄弟愛」をいつも持っていることは、神の愛によって救われたキリスト者が第一に求めなければならないことです。

2 節には、「**旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、知らずに御使いたちをもてなしました。**」とあります。このような互いの愛は、具体的な行動になって表れてきます。その一つが、旅人をもてなすことです。旅人をもてなすということは、当時の社会において非常に重要なことでした。というのは、当時は今のように宿泊施設が整っているわけではなかったからです。ですから、巡回伝道者や預言者、あるいは仕事で旅行しなければならなかったキリスト者にとっては、何よりもありがたいことだったのです。

「**ある人たちは、知らずに御使いたちをもてなしました。**」という記述は御使たちがアブラハムとロトのもとに訪れた出来事を指しています（創世記 18～19 章）。旅人をもてなすことは時間も労力もお金もかかるためかなりの犠牲を強いられますが、だからこそ私たちのためにご自身のいのちを犠牲にして愛してくださった主の愛にふさわしい応答でもあるのです。特に外国の方々をもてなしましょう。言葉や文化が違う所で生活することは私たちの想像を超える困難があります。そのような中で温かく迎えてもらえることは本当に助かります。「**旅人をもてなすことを忘れてはいけません。**」ということです。本当の愛はどのようにもてなすかということではなく、「兄弟愛」をもって愛すること、旅人をもてなすということを実践することなのです。

もう一つのことは、「**牢につながれている人々を、自分も牢にいる気持ちで思いやりなさい。**」と、投獄されている人々を見舞うことも挙げられています。これはどういうことかということ、信仰のために投獄されている人々を自分のことのように思うということです。この牢につながれている人々というのはキリストの名のゆえに投獄されている人々のことです。このような時、キリスト者は祈ることはもちろんのこと、自分も牢にいる気持ちで思いやり、時には訪問したり、何かを差し入れたりして、具体的に助け合うことが求められました。なぜかということ、その人たちは同じキリストのからだである教会に属している器官だからです。コリント第一 12 章 26 節に「**一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。**」とあります。私たちはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。私たちはそれぞれ一つのからだにつながっているの、一つの器官が苦しめば、すべての器官がともに苦しむのは当然のことなのです。

イエス様は投獄されているキリスト者を見舞うことを善い行いのひとつとして挙げておられます。しかもマタイの福音書 25 章 36 節に「**わたしが裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからです。**」とあるように、その善い行いは、それを実行する者の信仰が神から義と認めていただけることを最後の裁きの時に明らかにしてくれるものでした。これは 3 節の「**また、自分も肉体を持っているのですから、虐げられている人々を思いやりなさい。**」の教えと同じものです。

2. 結婚がすべての人に尊ばれるように

第二のことは、結婚がすべての人に尊ばれるようにすることです。4 節に「**結婚がすべての人の間で尊ばれ、寝床が汚されることのないようにしなさい。神は、淫行を行う者と姦淫を行う者をさばかれるからです。**」とあります。キリスト教信仰は古典古代における結婚の意味を変えました。当時はユダヤ教を信奉するユダヤ人たちの間でさえ離婚が一般化していました。マタイの福音書 5 章 27～32 節に「**姦淫してはならない**」と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦

淫を犯したのです。もし右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに投げ込まれないほうがよいのです。もし右の手があなたをつまづかせるなら、切って捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに落ちないほうがよいのです。また『妻を離縁する者は離縁状を与えよ』と言われていました。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも、淫らな行い以外の理由で自分の妻を離縁する者は、妻に姦淫を犯させることになります。また、離縁された女と結婚すれば、姦淫を犯すことになるのです。」とあります。結婚は本来神が制定されたものであって、人類の幸福と繁栄のために与えられたものです。その結婚が尊ばれなくなってしまいました。なぜなら、それを破壊するものがあるからです。それが不品行であり、姦淫です。ですからここに「**寝床が汚されることのないようにしなさい。**」とあるのです。

創世記 2 章 24 節には、結婚の奥義について「**それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。**」とされています。二人はどうしたら一体になるのでしょうか。父母を離れ、つまりふたりは結婚して、妻あるいは夫と結ばれ、すなわち、性的な関係が持つことによって一心同体になるのです。この順序が重要です。

箴言 6 章 27～29 節に「**人が火を懷にかき込んだら、その衣服は焼けないだろうか。もし人が、燃えている炭火の上を歩いたら、その足は焼けないだろうか。隣人の妻と姦淫する者は、これと同じこと。その女に触れる者はだれも罰を免れない。**」とあり、32～33 節には「**女と姦淫する者は良識がない。自分自身を滅ぼす者がこれを行う。彼は傷と恥辱を受ける。彼の汚名は消し去ることができない。**」とあります。「火」というのは「**隣人の妻**」のことです。そのような者と貫通すると、罰を免れません。それどころか、自分自身を滅ぼし、そのそしりを消し去ることはできません。例えば、ダビデがバテシェバと姦淫を行った時、詩篇 32 篇 3～4 節で「**私が黙っていたとき私の骨は疲れきり私は一日中うめきました。昼も夜も御手が私の上に重くのしかかり骨の髄さえ夏の日照りで乾ききったからです。**」と、その罪責感でたうちまわった、その心はカラカラに渴ききっていたと告白しています。ですからパウロは、コリント第一 6 章 18 節のところで、「**淫らな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、淫らなことを行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。**」と言っているのです。このように自分自身を滅ぼすということ、それがずっと消えないということです。だから不品行を避けなければならないのです。

幸いなことに、罪を犯したからといって、もう神は受け入れてくれないことはありません。傷は一生残るかもしれませんが、神は回復させてくださいます。もう一度麗しい関係を持たせてくださるのです。ではそのためにどうしたらいいのでしょうか。聖書は悔い改めと実りある人生のために、次の四つのステップを踏むことを勧めています。

① 悔い改め

第一に、罪を告白して悔い改めることです。ヨハネ第一 1 章 9 節には、「**もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。**」とあります。私たちが罪を犯したならばそれが罪であったと認めて、悔い改めることです。それが砕かれるということです。自分が間違ったことをしたと認めることが砕かれるということです。これが最初にすべきことです。

② 罪から離れる

第二のことは、その罪を捨てること、罪から離れることです。箴言 28 章 13 節には、「**自分の背きを隠す者は成功しない。告白して捨てる者はあわれみを受ける。**」とあります。どういう人があわれみを受けるのでしょうか。それを告白して、それを捨てる人です。自分のそむきの罪を隠す者は成功しません。

③ 神の聖さを求める

第三のことは、神の聖さを求めることです。詩篇 51 篇 10 節に、「**神よ私にきよい心を造り揺るがない霊を私のうちに新しくしてください。**」とあります。ダビデは、ナタンによって罪が示されたときその罪の赦しを求めただけでなく、きよめられることを求めました。

④ 悪魔の誘惑を避ける

そして第四のことは、悪魔の誘惑を避けることです。パウロは若き伝道者テモテにテモテ第二 2 章 22 節で**あなたは若いときの情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。**」と

書き送りました。罪から離れても、再び悪魔が誘惑してきます。誘惑自体は罪でも悪でもありません。問題は誘惑に落ちてしまうことです。どうした誘惑に勝利することができるのでしょうか。ここでは二つのことが言われています。一つは情欲を避けるということ、そしてもう一つのことは、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めるということです。そうすれば守られるのです。

バテシェバと姦淫して後悔と憂鬱の中に疲れきっていたダビデは、主に罪を告白し、悔い改めて、その罪を赦していただきました。その時彼は、詩篇 32 篇 1～2 節で「**幸いなことよその背きを赦され罪をおおわれた人は。幸いなことよ【主】が咎をお認めにならずその霊に欺きがない人は。**」と賛美しました。これは彼が罪を犯して悔い改め、その罪を捨て、離れることによって、罪をきよめていただいたダビデが歌った詩なのです。そればかりか、詩篇 51 篇 13 節に、「**私は背く者たちにあなたの道を教えます。罪人たちはあなたのもとに帰るでしょう。**」とあるように、その経験が、同じような罪で苦しんでいる人の助けとして用いられることもあるのです。イエス様はその罪を赦してください。そして、あなたをきよめて、ご自身のご栄光のために用いてくださるのです。

3. 金銭を愛する生活をしてはいけません

第三のことは、金銭を愛する生活をしてはいけないということです。5～6 節に「**金銭を愛する生活をせず、今持っているもので満足しなさい。主ご自身が「わたしは決してあなたを見放さず、あなたを見捨てない」と言われたからです。ですから、私たちは確信をもって言います。「主は私の助け手。私は恐れない。人が私に何ができるだろうか。」**」とあります。金銭を愛することは、神を愛することに逆行することです。イエス様は、マタイの福音書 6 章 24 節で「**だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることになります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません。**」と言われました。神を愛するのではなく、金銭を愛することが問題です。

人間にとって富は、実に容易に偶像になってしまいます。テモテ第一 6 章 9～10 節にも、「**金持ちになりたがる人たちは、誘惑と罠と、また人を滅びと破滅に沈める、愚かで有害な多くの欲望に陥ります。金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、多くの苦痛で自分を刺し貫きました。**」とされています。金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなければなりません。なぜなら、主ご自身が「**わたしは決してあなたを見放さず、あなたを見捨てない**」と言われるからです。この金銭を愛する生活をしてはいけないということが、このことと深いつながりがあるということです。すなわち、もしあなたがイエス様としっかりつながっていて、親しい関係にあれば、もう不満足であるということはないのです。あなたがイエス様に近ければ近いほど、あなたの心は満たされるのです。イエス様との関係が、あなたの心の満たしのバロメーターになるということです。主は決してあなたから離れず、あなたを捨てないと約束しておられます。

ですから、6 節で「**ですから、私たちは確信をもって言います。「主は私の助け手。私は恐れない。人が私に何ができるだろうか。」**」と語っています。このような確信はどこから与えられるのでしょうか。聖書の御言葉です。聖書の御言葉をベースにして生きるなら、たとえ問題があっても、たとえ不安なことがあっても、私たちは「**主は私の助け手。私は恐れない。人が私に何ができるだろうか。**」とできるのです。人を恐れるとわなにかかります。しかし、主を恐れる者は守られるのです。「**主は私の助け手**」です。人間は、私に対して何もすることができません。だから何も恐れる必要はありません。

この手紙の受取人であったユダヤ人キリスト者たちは、迫害によって財産までも奪われていました。彼らは、すべてを失ってしまったのです。けれども、彼らには信仰がありました。それは、主が彼らとともにおられるということです。イエス様を持っているということはすべてを持っています。なぜなら、それは永遠のいのちを持っているからです。この主が共におられることこそ、私たちが勝利ある人生を歩んでいく秘訣なのです。あなたはこのイエス様を信じていますか。そして、イエス様にしっかり繋がっていますでしょうか。イエス様が共におられるなら、あなたはそれで十分です。イエス様があなたを助けてくださるからです。これが、キリスト者の人生観の根底にあるものです。